しんらん同人

NO, 520
9月号

二〇一四年九月一日発行　郵便番号171-0052
発行所　東京都豊島区南長崎一の三の八　誓願寺
TEL　3950　7828　FAX　3950　6820
mail　SEIGANJI@RESET.JP

光の中の私

南無阿弥陀仏のいわれをよくよく聞いて、如来の願いが煩悩に狂っている私を救わずにはおかないとの願いであった、南無阿弥陀仏は間違いなく救われている証拠であったと知らされてみれば、この身このまま救いのみ手のなかで、なんという幸せ者であったかとよろこばずにはおれません。

「われも光のうちにあり」と前住職が書いた額が本堂の正面に掛けてありますが、その文字を見るたびに如来のまことが私のうちにいたりとどいて下さったことを味わいます。

仏立像

トーラナ（伝統的なインド建築にみられる塔門）を背景にした小立像の奉献石板
左手は胸前で衣の端を握り、右手剥落する施無畏印の輪郭が看取される

如来のまことが私の心の中に入り、みこの光に包まれた身であるからには、臨終を案ずることはありません。できることなら、安らかな最後でありたいと思いますが、どんな業を担っているかわかりません。

苦しみながらいくか、安らかにいけるか、全くわかりませんが、どんな業をもっていようともお慈悲の中なのですから、いのち終われば、そのままお浄土に参らせていただくのであります。

「臨終に仏のお迎えをいただきたいと思うのは、自分の力でお浄土に生まれようと思っている人たちである。如来の本願を信ずる人は、光におさめとられており、往生に間違いない身にしていただいているのであるから、臨終の善し悪しを考えることもいらないし、あらためて仏のお迎えを期待することもない。信心が定まる時に往生も定まるのである」と親鸞聖人は仰せになっており、蓮如上人も「されば信をえたるくらいを経には即得往生住不退転とと き、釈には、必ずお浄土に生まれ往く身にさせていただいている」といわれ、それは今のよろこびであります。

これから先の日暮しは、幸か不幸か　知らないが、どちらに成ってもよろしい と、確かな覚悟ができました　雨も嵐　もあるであろう、照る日　曇る日それ　ぞれに、生き抜く道をばめぐまれて、　心晴れ晴れ生きていく

と歌われているように、心はればれと生き抜かせていただく大きなよろこびこそ、平生業成の人のありがたい姿であります。

九月二十三日午前十時

彼岸会法要

講師　高田慈昭師

前住法話

信心とは

世の中はどのように変わっていくのだろう。少なくとも形有るものだけを信じ、形のないものは否定するというグループと、形のないものも信じてゆくという二つにわかれてくるのではないだろうか。

一方は宗教を否定し、他方は信ずるという二つ。

ただここで考えなければならないのは、宗教を信じるといっても、「真実」でないものは、その範疇にはいらない。

教行信証薬師経を引いて

「清浄の信を得たものは、生涯他の諸神を信じてはならない。人々は悪魔や外道あるいは妖術師を信じて道理に合わない禍福の邪説に迷い、不安、恐怖を生ずるのである。心自体が正しくないから、物事を占い問うては災いを招き、ついには大の命を害するに至る。あるいは神明に祈願し、妖怪を呼んで福を求め長寿息災を祈って、しかもこれを得ることができない。愚かにも迷って、邪説を信じ、間違った見解をもち、ついには非業の最後を遂げて地獄に入り、出るときがないのである。」とある。

いつの時代も変わらない。新興宗教など人の心の弱さを利用し、金儲けや、人心を惑わすようなものは、真の宗教とはいえない。はっきり区別する必要がある。

浄土真宗の門徒でも、名ばかりの門徒が多い。初詣では神社、仏閣にお参りし、「お金が儲かりますように」「早く病気がよくなるように」

とお祈りした人はいませんか。

「かなしきかなや道俗の　良時吉日えらばしめ天神地祇をあがめつつト占祭祀つとめとす」

人の弱みこそ人間にとって不変の本質である。「お願いします仏様」と手を合わす人を信仰家と考えるのは間違いである。

本当の帰依処を得ることが信心である。生のよりどころ、死の帰するところを得る、身も心もただひとつのものに頼り切れるものを言う。これがあるから生きてゆける、これがあるから死んでゆけるものが、本当の帰依処である。

前坊守三回忌法要

前坊守英子の三回忌には沢山の方々にお参りいただき本当に嬉しく思いました。やはり生前の働きが、よかったのでしょう。私も学ばなければとつくづく感じました。ありがとうございました。

質疑応答

問　お寺より本堂建築の寄付の依頼がありました。一口十万円で三口以上ということです。当方には檀家になったという認識がないのですが、寄付をしなければならないのでしょうか。檀家とはいつの時点で成立するのですか。

答　寺とか神社は「宗教法人法」という法律で守られています。ですから、大きな建物や境内地を持っていながら税金がかからないことになっています。お寺が個人の持ち物ではなく、宗教心を養うために多くの人々に使われるものということを国家が認めている。

お寺には次の機能があります

①修行するところ（仏道修行場）
②み仏を拝むところ（礼拝の場）
③法要や法事をつとめるところ（葬祭の道場）、
④教えを広めるところ（教化の道場）
⑤生活するところ（寺族の道場）ということです。

檀家制度というのは、江戸時代の寺請（てらうけ）の制度を継続しています、昔はお寺が、町役場や市役所の戸籍係のようなことも担当させられていました。

ただ、今は憲法において宗教の自由が保証されています。宗教を信じる自由も信じない自由も両方保証されています。それは、それぞれの個人の基本的人権を保証するということが根底にあるからなのです。その意味からすれば、寄付の強要は間違いということになります。

仏教には喜捨とか布施という考えがあります。これは私たち一人一人の菩根功徳を積ませていただくというところに真意があります。

お寺と檀家という関係は、信仰を柱として共に仏法を大切にしていこうという人間的な、暖かく温もりのある関係です。お寺は仏法を多くの人々に伝達、教化するところです。そのことを法施といいます。布施のことをインドの言葉でダーナといい、それが檀那になりました。法を布施するお寺のことを檀那寺といっております。それに対して報恩感謝の布施をする人々のことを檀那とか檀家といったのです。

あなたは檀家になった記憶もないのに、突然お寺から寄付を請求するとは何事だという気持ちなのではないでしょうか。私は寄付をご依頼したお寺があなたのことを全然知らないで、連絡したとは考えられません。

今、あなたのしなければならないことは、まず寄付を依頼して来たお寺に、なぜ、私のところに本堂建築の寄付が寄せられたのかをお尋ね下さい。二つめは、私は檀家となった記憶がないが、お寺の方ではどういう取り扱いになっているかを確認することです。

この二点をはっきりしていただいてから、あなた自身の態度を決めても遅くないと思います。

補足しますが、檀家であるかないかをお寺の方で一軒一軒確認すべきなのですが、お寺によっては、古くから総代、世話人の方々が土地事情をよく知っていて、そのまま何となく檀家に入れているところもあるように聞いています。

新しい納骨壇

安心して生きていくための準備です。先祖代々の墓地等があっても、核家族となり、親子関係がも段々変わりつつあります。安心して生きていくための準備が必要な時代です。お寺のほうで永代に供養できる納骨壇です。費用は一人用三十万円と管理費です。希望の方は早めに、お申し込みください。

釈尚文 独り言

八月のある週に、お寺の掲示板に掲げた言葉「食事とトイレは代理がきかない、生命の一大事だから。聴聞も代理がきかない、心の一大事だから。」この世の中で、大切なものは代理がきかないのであります。そう思いながらも、いかに多くの物事を簡単に代理に近い形ですまそうとしている毎日でしょうか。もっとひとつひとつの事を大切にして過ごしたいものです。

八月の「しんらん同人」に、故岡本泰雄住職の法話が掲載されていました。（再度お読みいただきたいと思い、この九月号に同封をさせていただきます。）

繰り返し何度も読み返させていただきどの文節も私の心に突き刺さってまいります。

私自身に関する事、僧侶としての行動に関する事等々。

猛暑の夏も過ぎ去ろうとしていますが、今のこの思いを大切に心に刻んで精進したいものです。

追伸

九月十四日（日）十時からの定例法座を、誓願寺婦人会主催の「物故者追悼法要」として開催いたします。

ご講師　加藤純幸師（本願寺布教使。三重県専念寺）お誘い合わせの上お参りください。

また、九月開催予定のバザーは、十一月二十三日（日）報恩講の際に行います。

九月御法座案内

十四日（日）　午前十時　特別法座
講師　加藤純幸師

正午　健康相談
講師　佐藤公彦医師

二十一日（日）　午前十時　なかよしくらぶ

二十三日（祝）　午前十時　彼岸会法要
講師　高田慈昭師

加藤純幸師　自己紹介

私は東海教区、専念寺坊守昭和十八年六月生

三歳の時、非常な高熱で両耳難聴、右下肢機能障害という後遺症にも育てられて、仏縁が深められ、広げられ感謝と感動にお礼の昨今です。

編集後記

◎昨年七月に手術して、やっと元に返って来た気がするが、七十二キロあった体重が五十キロになり、いまやっと五十五キロにかえった。

◎初めて大きな病気をして、その辛さを体験した。段々病気が悪くなって死ぬのではないかとか。足が立たなくて歩けなくなるのでは、と余計な事ばかり考えて右往左往する私がおかしかった。元気になると笑い事になってしまうが、本人は、真剣そのもの、後で考えると全くおかしな事である。

◎またどうなるか解らないのが、私どもである。今日の今を大切に精一杯生きることが必要である。

◎八十歳となる。よく考えてみると親父もお袋も八十までは生きていない、まさかと思うが、一番長生きである。どうしたらよいのだろうか？ここまで生きたという証を立てたい。

◎リキもナナも元気